

## C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese di Kyoto

現地語学学校紹介： フィレンツェ

## \* Scuola Toscana \*

Alberto Del Mela (同校校長)

## ●学校の場所

私達スクオーラ・トスカーナはフィレンツェの中心地、サンタクロッチェ広場に面する Via Dei Benci 23, Palazzo Mari の歴史上最新の住人として 20 年前からここに居を構えています。Palazzo Mari は 15 世紀には、フィレンツェでも大きな勢力を誇ったフランチェスコ修道会のサンタクロッチェ教会に付属する、修道女のための住まいでした。今でも地下は当時そのままの姿を残しています。

Palazzo Mari という建物の名称は 17 世紀に遡る Mari 家という貴族の宮殿であったことに由来します。ご存知の方もあろうかと思いますが、19 世紀中頃までは統一国家としてのイタリアという国はありませんでした。フィレンツェもトスカーナ大公国の首都だったのですが、やがてちょうど日本の明治維新と同じ頃に、トリノを首都とするピエモンテがイタリア半島の他の国々を併合する形で、イタリア王国が誕生します。この激動の時代に政治家として活躍した Adriano Mari は Palazzo Mari の増築を行ないましたので、その結果この地区で最も高い建物の一つになりました。なお、彼の子孫の一人で、やはりこの建物に住んでいた Marino Mari は、パルチザンの一員としてナチ・ファシズムと戦い、そのためにモーサウゼンの収容所で死んでいます。

イタリアの建築、フィレンツェの街並み、それらはミケランジェロやレオナルドが歩いた道や見つめていた壁を通してタイムマシンのように私達を彼らの時代に連れて行ってくれるのです。



【歴史が息づくフィレンツェの街】

学校のあるサンタクロッチェ地区には、小さな電動バスがやっと通れるくらいの古い石畳の街路が多く、賑やかなフィレンツェにあっては稀な静かな地域です。そうした街路は午後の散策にぴったりで、職人たちの小さな工房、修理屋、古道具屋、古本屋、エスニックフード店、それに道のそこかしこにある古い石版標識などが歴史を語りかけてきます。夏にはこちよい日陰ができますし、秋冬には低い太陽光が差し込んで、まるで絵のような光と影の効果を作り出します。写真のワークショップにも最適です。

## ●講師陣

スクオーラ・トスカーナの講師達は、いわば一つのチームを作っています。そして、一人一人の講師が何かしら“道具箱”をもって教室に向かい、時々新しくその中身を付け足していくと同時に、これに加えて同僚の先生達との意見交換を重要視しています。毎日、授業の前後に顔をあわせ、レ

ッスのこと、それぞれのクラスの学生のことなどを話し合います。こうして様々な可能性を検討し、計画を作り、意見交換が行われるのです。講師にとって、授業とは一つのパフォーマンスです。もちろん、授業の内容は予め計画し、言うべきこと、するべきことを用意するのですが、教室で起きることを全て事前に知っておくことはできませんから、いつもその場で臨機応変に対応することが求められます。熟練した講師であっても、まじめな教師であれば授業前にはいつも多少の緊張を感じるものです。そして、教室を楽しみと研究の場、皆で成長する場とすべく、一人一人が取り組んでいます。



【教室にて】

### ●ホーム・ステイ

フィレンツェ市内ではなく郊外に住むメリットは決して少なくありません。郊外には外国人が多くないので、住民が留学生に興味を持ってくれるのです。特に長期滞在をされる方の場合、人々が朝食をとったり、夜にはスポーツ観戦のために集まったりするバルなど、近所の人々と仲良くなることができます。

「学生さん達に食べてもらうものは週末にマレンマ地方まで行って農家から直接買ってくるんだよ。豚、羊、ペコリーノチーズ、トマト、新鮮な卵…季節によって見つかるものを…。うちへ帰ってその食材でいろいろなパスタソースを作るんだ。ラグーとかトマトソースとかね…」こう語るのは、当校と最もお付き合いの古い“二食付ホームステイ”の家庭の一つのルイーザさんです。食事つきホームステイを受け入れてくれる家庭のお母さん達は食事作りを楽しみにしていて、食材についても、どこから来るのか、どんな料理法がある

のか…などを説明してくれます。そして一緒に食事を楽しみ、おしゃべりをし、食後には一緒にテレビを見たりジェラートを食べに出かけたりします。

フィレンツェの本当の生活は郊外、つまり観光客相手ではなく、地元の人々の生活圏にあります。またそこには公園やたくさんの小さな店、バルなどがあります。

### ●課外活動

“街を知ること、問題を解決すること、創造的であること”、課外活動においてガイドを務める当校の講師は、どんなことがあっても対応する用意をしています。例えば、フィレンツェの市内散策の間に大雨が降ってきて、誰も傘を持っていないとか、美術館の前までやってきたら職員会議で閉館中だったりとか。課外活動を担当する講師達は、口には出しませんが、必ずイザというときのための“プラン B”をもっています。イタリアではそういったサバイバル精神が常に要求されます。

ですから、スクオーラ・トスカーナで課外活動に参加すると、歴史や美術、建築の勉強にとどまることなく、イタリアの人々の生き方や交渉術も身につけることができます。チケットを割引価格で買うには？満員のバスで座席を確保するには？閉館時が来てもさらに 10 分間館内に残るには？通常は非公開の地下聖堂を開けてもらうには？



【課外活動の旅先で】

### ●料理コース

料理コースもスクオーラ・トスカーナの誇りとするところ。料理家であるフィアツメッタ先生を獲得できたことは非常に幸運でした。サッカーチームがベッカムを買ったようなものです。人を楽ませるためには自分がまず楽しまなければなりません。フィアツメッタ先生はいつも料理をする

こと、説明すること、学生達に料理を作らせることを楽しんでいます。彼女が執筆したレシピ本でも語っているように、彼女の料理は曾おばあさん、おばあさんからの伝統を受け継いでいます。彼女はこう語ります、「食文化への情熱は、愛情とともに受け継ぐことによって魔法になるのです。創造性を刺激し、形と味わい、色のハーモニーで、近くにいるものを全て豊かにしていく、これこそが家庭料理の芸術です。」



【フィアツメッタ先生の料理コース】

### ●環境への配慮

もともと学校の活動は著しい環境破壊をおこすようなものではありませんし、エネルギーを大量に消費するものでもありません。しかし当校はこの20年間いつも環境保護とエネルギーの節約に積極的に取り組んできました。イタリアではまだ誰も行っていなかったころから常に分別ごみの仕分けをし、コピー用紙はリサイクルペーパーかFSCの証明のあるものを使い、照明には省エネルギーのものを用い、また使ったものを回収して再利用することに努めるメーカーの製品を利用しています。

### ●万全のサービス

2年間かけて徐々に学校の窓を、伝統あるオリジナルの木枠を残したまま、より密閉効果ができるように修繕してきました。そして、課外活動を行うときはもちろん公共の移動手段を使います。スクオーラ・トスカーナでは環境保護はファッションではありません。学校が生まれたときから私達の中にはこの考え方が息づいているのです。

また、日曜日は学校にとって“舞台裏”の日です。授業はお休みですが、校長や“技術者”が来ます。クラスの準備を行ったり、月曜日にやってくる新しい学生のリストをチェックしたり、教室、時間割の管理をおこなったり…落ち着いてじっくりと点検します。各教室を回ってホワイトボードマーカーや椅子を点検します。“技術者”ファブリッツィオは教室のペンキを塗りなおしたり取っ手を直したり、“ホームシアター”の音響システムや教室の無線LAN接続の具合を調整します。私達は全てがカンペキになるまで安心しません。なぜなら月曜日には新しい学生が到着するのですから！

当校はそれほど大きい規模の学校ではありませんし、それほど古い伝統があるわけでも、豪華なわけでもありませんが、革新的な学校であることは自信をもって言えます。当校は様々な国の人々が出会い、誰も“よその”になることはなく、知的好奇心をもって日々を楽しみ、お金ではなくそれぞれの人の生き方を尊重する、そんな場所です。家から遠く離れていても、家にいるようなあたたかさを感じられる場所です。どうかイタリア語の格言にあるように、“provare per credere” 実際に体験して確かめてみてください。



【パーティの様子】

【Scuola Toscana 校長、訳：橋本いずみ(同校スタッフ)】

イタリア発月刊日本語新聞

**COMeVA?**  
Pubblicazione mensile distribuita in Italia e in Giappone

イタリア在住日本人と日本人観光客のための情報誌

編集・発行 NIPPON CLUB SNC  
Via Torino, 95 - 00184 Roma, Italy  
Tel. & Fax : (06) 4743. 212  
E-mail : comeva@nipponclub.it  
URL : www.nipponclub.it



# VIVA IL CINEMA ITALIANO !

## 第20回『副王家の一族』

*I Vicerè*

松島 征

今回は、最近公開されたロベルト・ファエンツァ Roberto Faenza 監督作品『副王家の一族』 *I Vicerè* (2007)を取り上げます。この作品は、近代国家としてのイタリアの統一前後の時期におけるシチリア島を舞台にした歴史絵巻であり、2008年度のダヴィッド・ディ・ドナテッロ賞の衣装賞・美術賞など四つの賞を獲得した話題作です。ロベルト・ファエンツァ監督は1943年、トリノの生まれ。わが国ではあまり知られていませんが、イタリアのネオ・レジスタ(新しい監督群)の一人として1960年代から活躍しているヴェテランの映画監督です。

映画の原作は、ナポリ出身のヴェリズモ作家フエデーリーコ・デ・ロベルト(1861-1927)の小説『副王たち』 *I Vicerè*。原作は1894年に上梓されたのですが、発表当時はほとんど評判にならなかったらしい。この小説が注目を浴びるようになったのは、ルキーノ・ヴィスコンティが、シチリア出身の貴族ジュゼッペ・トマーゾ・ディ・ランペドゥーサ原作の『山猫』 *Gattopardo* (1963)を映画化して以来のことだそうです。実際、『副王たち』の方が『山猫』よりも先に発表されていたので、ランペドゥーサは大いにその影響を受けたとのこと。vicerè(副王)という語をイタリア語辞典(Zingarelli)で検索してみると、次のような説明があります(ちなみに、辞書では *viceré* と表記。アクセント記号の向きが逆になっています)。

s.m. Chi è domandato a governare, in nome del re, una parte specialmente lontana del territorio metropolitano, del regno. (王の名のもとに、とりわけ本国の領土・王国から遠い地域を統治することを委託された者)

どうもわたしには「副王」という訳語はなじめない。「総督」の方がわかりやすいと思う。それはさておき、いつものように映画の粗筋を述べながら簡単なコメントをつけます。

- 1)物語は、1853年、ブルボン王家支配下のシチリアの町カターニャで始まる。主人公コンサルヴォは当時12歳の少年で、横暴で独裁的な父親ジャコモの気まぐれに耐えながら、一族に起きるべきことを観察し[観客に]報告するという狂言回しの役割。
- 2)スペイン副王末裔の貴族ウゼダ家の公爵夫人テレーザの死[第一の死]をめぐる遺産相続のごたごた。長子相続権が廃止になったため、テレーザの遺産は長男のジャコモと次男のライモンドとで折半することに決まる。折しもカターニャにコレラが発生し、一族はエトナ山麓に所有する別荘に避難。そこでライモンドとある伯爵夫人との不倫の関係が発覚し、ジャコモはそれをもみ消すことを条件に、ライモンドの遺産相続分を自分の管理下に置く。
- 3)一族の全財産を手中におさめたジャコモは独裁的な家長として君臨する。妹のルクレツィアは弁護士ジュレンテとの結婚を望むが、相手が貴族ではないという理由でそれを認めない。コンサルヴォは、死産で生まれたいとこの胎児がホルマリン漬けにされた瓶を妹テレーザに見せたために、父親の逆鱗に触れ、見せしめのためベネディクト派の修道院に入れられる。[親族を演じる俳優たちがそれぞれ個性のあるマスクをしているのがおもしろい。ああこれぞイタリア映画、と感心することしきり。とりわけルクレツィア役の女優の顔が印象深い。かつて醜女の恋を主題にした『パッシオーネ・ダモーレ』(エットレ・スコラ監督、1980)という映画を見たことがあるが、そのヒロインであったフォスカのことを連想させる、きわめて個性的なマスク]
- 4)ベネディクト派の修道院における修道士たちの腐敗堕落ぶりの様子がコミカルに描写される。修道院長のプラスチックは深夜早朝の祈禱をいやがって、貧しいカプチン会の修道士たちに金を払って祈禱をさせている。娼婦を夜間こっそり修道院に導き入れたり、愛人に子どもをませたりする脱線ぶり。
- 5)1860年、ガリバルディに率いられた義勇軍(赤いシャツを着ているので「赤シャツ隊」と呼ばれていた)がシチリアに上陸し、ブルボン王家の支配から島を解放する。修道院で7年を過ごしたコンサルヴォはその混乱に乗じて、いとこのジョヴァンニーノとともに修道院を脱走し、群衆の中で自由を謳歌する。一方、父ジャコモは過激な変革を恐れて、家族を連れてカターニャからの脱出を試みていた。
- 6)家にもどってきたコンサルヴォは、母マルゲリータ

が危篤の状態にあることを知り、「なぜ知らせてくれなかったのか」と父親をなじる。献身的な介護も及ばず、母は病死[第二の死]。亡き妻の埋葬もすまないのに、ジャコモはいとこのグラツィエッタとの再婚を宣言。弁護士ジュレンテがカタリーニャ市長に任命されたので、妹のルクレツィアとの結婚を認める。ジャコモは「ウゼダ家は、王の治世には王の友、貧民の世には貧民の友」と公然とうそぶいて、風見鶏ぶりを発揮する。息子のコンサルヴォを一家の疫病神と見なして、悪魔払いの黒ミサに没頭する。

7)父に反抗しながら遊興の日々を送っていたコンサルヴォは、ふとした出来心から平民の娘コンチェッタを陵辱し、彼女の兄弟から復讐を受ける。路上で刺された彼は重傷を負う。ジャコモは厄介者の息子を旅に発させる。[このあたり、ファエンツァ監督は、「プレヒト的異化効果」を存分に利用している。つまり、父親が独裁的で横暴な分だけ、息子も身勝手に退廃的、どっちもどっちだ、という設定]

8)1872年。妹のテレザが寄宿学校からもとどり、いとこのジョヴァンニーノ(ラダリ公爵家の次男坊)と愛し合うようになる。ジャコモは若い二人の結婚を認めず、娘を公爵家の長男でデブのミケーレと婚約させる。[コンサルヴォはミケーレのことを“Michele, lo scorpio”と呼ぶ。なぜミケーレが「サソリ」呼ばわりされるのか、と思って辞書を引いてみたら“lo scorpio”には「醜い男」という意味があった]

9)テレザとミケーレの結婚式のあとのパーティで、ジョヴァンニーノは愛するテレザと踊った後、別室にこもり、コンサルヴォの面前でピストル自殺を決行する[第三の死]。

10)修道院長プラスコは莫大な財産を残して死ぬ[第四の死]。遺産を相続したのは、意外にも彼の異母弟で敬虔なカルメロ修道士(ドメニコ会)であった。

11)ジョヴァンニーノの死をきっかけにコンサルヴォは独立し、カタリーニャの市長に就任。1882年の総選挙では左翼連盟から立候補するが、教会とブルジョワの右翼の票もたくみに手に入れて当選を果たす[このあたり、風見鶏であった父親の処世術を立派に受け継いでいる]。

12)コンサルヴォはいったん父から相続権を奪われるが、父は死の床でそれを取り消す[第五の死]。

13)父の死後、ウゼダ家の家長となったコンサルヴォは「愛よりも金よりも重要なもの、それは権力だ」と

公言して、あれほどにも憎んでいた父親と同じように権力に執着する。

14)最後の場面は、1918年(コンサルヴォは77歳)。国会議員となったコンサルヴォは、議事堂において「イタリア王国は誕生したが、不正は以前のままだ。そしてかつての有力者・実力者がその地位を確保している」と語る。[辛口のエンディング]

このようにウゼダ家一族の60年余りの歴史が、5名の人物の死を節目にして息子のコンサルヴォの視点から語られるという仕組みになっています。この一族の歴史において、愛はつねに不毛でした。ジャコモとコンサルヴォの親子は最後まで憎みあうばかりで、和解することはありません。庶民の娘コンチェッタに対するコンサルヴォの一方的で攻撃的な愛情は、彼女の兄弟からの復讐を招きます。妹のテレザは、いとこのジョヴァンニーノと相思相愛の仲でありながら、二人の恋愛は悲劇に終わります。ジャコモの弟ライモンドは、不倫の恋が発覚してウゼダ家からはじき出されてしまいます。唯一の例外は、平民の弁護士ジュレンテと恋愛結婚したジャコモの妹ルクレツィアのケース、と思わせるのですが、それもまたカタリーニャ市長ジュレンテの失脚により破局を迎えることとなります。他方、出産による一族の再生産行為もうまく行かない。ジャコモの妹キアラは3回にわたって死産を重ねます。最後は夫に小間使いのローザをあてがって、婚外出産により息子を作るしかない。

それにひきかえ、死と葬礼のエピソードは5回に及び、それぞれ一族にとって重要な意味を帯びています。まず公爵未亡人の遺産をめぐる相続争い。一生涯、夫から報われることのなかったマルゲリータ(コンサルヴォとテレザの母)の死、腐敗堕落した修道院長プラスコ師の死(アンシアン・レジームの終焉の象徴か)。テレザの恋人ジョヴァンニーノの悲劇的な自殺。そして最後に、独裁的な家長であったジャコモの死、といったぐあい、この映画の節目を形成しているのは、主役や脇役の死に様なのです。まるで「愛や出産よりも死の方が人間の一生にとって重要なのだ」と云わんばかりです。

では最後に、ヴィスコンティ監督作品『山猫』(ジュゼッペ・トマーゾ・ディ・ランペドゥーサ原作)との

比較をしながら、この稿を終えることにしましょう。バート・ランカスター、アラン・ドロン、クラウド・ア・カルディナーレといった存在感にあふれるスターが主演を演じる『山猫』に比較すると、わが国で名の知れた俳優が出ていないこの映画は小粒であることを否定できない。こちらの方が登場人物が類型化されていて、映画のテンポも小気味よい分だけわかりやすいし、ある意味では『山猫』のパロディを意識して作られたにちがいない。『山猫』が貴族文化の凋落を同情と哀感でもって描いているのに対して、『副王』の方はそれを歴史的必然として提示している。いわば「貴族は滅びるべくして滅びた」という貴族文化の否定なのです。その意味では、アンティ・ヴィスコンティ派である筆者に爽快感を提供してくれる映画ではありません。

でも、見終わってからじっくりと考えてみるならば(わたしは映画館で日を改めて2回見ました)、『山猫』の芸術作品としての優位は歴然たるものだと思うに至りました。いかに貴族文化を称揚しているとはいえ、『山猫』には、映像作家としてのヴィスコンティの立脚点である〈ネオ・レアリズモ〉が息づいています。例をあげましょう。19世紀における、貴族とマフィアの腐れ縁が『山猫』にはしっかり描かれています。農地管理人であり村の実質的な支配者であるドン・カロージェロは、武装したならず者たちを配下にもつ農村マフィアのボスでもありました。『山猫』の主人公サリーナ公爵は、ふだんは首都のパレルモに住む「不在地主」でした。ドン・カロージェロは地主の不在を利用して、合法的な、あるいは非合法的な手段で本来は公

爵のものである土地を次々と自分のものにして、富を築きあげたのです。カターニャでも事情は似たようなものであったと思われるのですが、『副王』にはマフィアらしき人物は一人として登場してこない。そこまでしっかり書き込まなければ〈歴史絵巻〉として十分なものとは云えないでしょう。

次に映像自体が喚起する美意識に大きな差があります。『副王』は映画のテンポが速い分だけ、スクリーン上のイメージに立ち止まってそのコノテーション(含意)を推察する時間的な余裕をあたえてくれない。難しく言うならば、記号(signifiant)が意味(signifié)に従属するものとなり、映像記号の自立性が損なわれているということです。その例として「赤シャツ隊」と「ブルボン兵」との間の戦闘シーンをあげることができます。市街戦では、「ブルボン兵」たちによって一般の市民が銃殺の刑に処せられるシーンがあります。残された妻女たちは怒りに駆られて、ブルボン派の警察署長をリンチにします。戦闘においては〈欲望〉が過剰なはけ口を必要としていることが、映像記号によって示されているのです。また、廃墟と化したパレルモの町をいたいけな少女がさまようシーンがありますが、『副王』では、そのような場面はなく、「めでたく市民側が勝利した」という歴史の単純化がなされています。〈歴史絵巻〉であると称するからには、もっと映像に厚みがあり、複数の意味作用が働いていなければならない、とわたしは思うのです。

(京都大学名誉教授・フランス文学)

## … 会館だより …

### イタリア語 in ヴァカンス

内容は当館初級2レベル(近過去、複数形等)

講師: 当館イタリア語講師

日時: 12月23日(水)~ 26日(土)

10:30~16:30(26日は14:00終了)

参加費: 30,000円(教材費・税込)

会場: 日本イタリア京都會館 本校

### イタリア語 無料体験レッスン

1月より開講の冬期イタリア語講座に向けて、体験レッスンを開催します。入門者向け。事前予約制。

● 梅田: 大阪駅前第4ビル

1/ 7 (木) 19:00~20:30

1/10 (日) 13:00~14:30

1/10 (日) 15:00~16:30

● 四条烏丸: ウイングス京都

1/12 (火) 19:00~20:30

● 京都本校: 日本イタリア京都會館

1/ 9 (土) 11:00~12:30

1/ 9 (土) 13:00~14:30

1/13 (水) 11:00~12:30

編集・発行 / (財) 日本イタリア京都會館

〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4

TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357

E-mail: [centro@italiakaikan.jp](mailto:centro@italiakaikan.jp)

URL: <http://italiakaikan.jp/>